

## 伊吹山の山岳信仰

## 伊吹山頂遺跡

伊吹山麓は、滋賀県における縄文遺跡の密集地のひとつです。約4,000年前の縄文時代中ごろから、伊吹山の水と山の恵みをよりどころに集落が営まれました。山麓の遺跡からは、子孫繁栄や豊穡をまつる石棒<sup>せきぼう</sup>が20点以上みつっています。これは、伊吹山に対する原始信仰の道具です。山頂からも、これまでに14点の石鏃<sup>せきぞく</sup>や石のナイフ、石器を作ったときの破片が見つっています。山に登った縄文人がいたようです。

古代には、英雄日本武尊<sup>やまとたけるのみこと</sup>を退けた荒ぶる神の棲む山として畏れ敬われ、平安時代には日本の「七高山<sup>しちこうざん</sup>」のひとつに数えられて薬師悔過<sup>やくしげか</sup>の行がおこなわれました。山頂一帯は「蓮上<sup>れんじょう</sup>」とよばれました。山岳修行の最終目的地を指し、弥勒堂が中央に鎮座する伊吹山の広大な山頂(下の写真)は、その景観からも神仏がおられる蓮華坐<sup>れんげざ</sup>を思わせます。山中の遺跡や伝承地は、山岳信仰や雨乞い祈願にまつわるものがたくさんあります。明治12年に三角点が設置された際も、弥勒仏1体・刀剣2振・鏡2枚の出土が伝えられています。

雨乞いのために江戸時代の農民がはじめた太鼓踊りは、山麓の多くの村々で踊られていました。登山口上野の太鼓踊りは、かつて伊吹山中の寺社や洞窟などに願いをかけ、山頂弥勒堂前で松明<sup>たいまつ</sup>を焚いて雨を祈りました。太鼓踊りは、北近江全域から西美濃地方に集中して分布し、その中心には伊吹山があります。このことは、伊吹山の神が水の神であることを物語っています。



